日本リスク研究学会
The Society for Risk Analysis Japan

2009 Newsletter No.1 [Volume.22] April

発行　日本リスク研究学会
会長　東海 明宏
事務局　〒564-8680　大阪府吹田市山手町 3-3-35
関西大学社会学部　土田研究室気付　発行責任者・広報担当　近本一彦
TEL. 06-6368-1121(代)　FAX. 06-6368-0735
mail: office1@sra-japan.jp URL: http://www.sra-japan.jp/cms/

日本リスク研究学会は，日本におけるリスク研究と研究者相互の交流を図ることを目的として，1988 年に米国に本部をもつ国際的なリスクについての学術団体である SRA(The Society for Risk Analysis)の Japan section として発足しました。現在では，米国，欧州，東南アジアの諸学会と緊密な連携をとりつつ独自の活動を展開しています。

1. 東アジア･リスク研究会議の足跡を辿る

(独)防災科学技術研究所客員研究員

筑波大学名誉教授　池田　三郎

1．はじめに：東アジア・リスク研究ネットワーク形成の事始め

1998 年 11 月 22 日，成田空港の出発ロビーでは，日本リスク研究学会からの参加者の多くは，北京における大雪のために，北京行きの出発時間の大幅な遅延やフライトのキャンセルがあり，成田空港で右往左往するはめになった。前途多難を暗示する事態であり，主催者の一人としてプログラムの変更，最悪の場合には，大会の延期などが必要になるのか，頭を横切った。私の搭乗便は，幸いにも午前中の便が午後の出発に変更され，おおよそ 6 時間程度の遅れで到着し，北京側の主催者の配慮（出迎えの学生さん達が寒波の中を数時間以上も待機していただいた）で，深夜ではあったが，何とか会場のホテル（China Hall of Science and Technology: 都心に近く，木犀（モクセイ）の名前を冠した清潔な地下鉄の駅近く）にたどり着いた。午後の遅い便での参加者も，翌日中には全員到着されて，初日は登録，公式レセプション等であったために，会議のプログラムを予定通りにスタート出来ることに安堵したのを記憶している。多難な旅を強いられた日本からの参加者の総数は，本学会の第 12 回年次研究発表会を兼ねるという意味でも，当時の広瀬弘忠会長（東京女子大）盛岡通副会長（大阪大）等の学会役員一丸となった努力が実って 42 名という規模で，中国側は正式の参加者数の報告はなかったが，我々よりも少し多い程度ではなかったかと推測している。

こうして日本と中国の共同の第 1 回リスク研究会議は幕を開けたのだが，その足跡の事始めを辿れば，1992-1994 年頃における SRA（Society for Risk Analysis: USA）での活動にまで遡ることになる。この時期は，1988 年に SRA-Japan Section として発足した日本リスク研究学会が，会員数 300 名程度となり，年次学会，学会誌の発行等の形態が確立し，最初の記念碑的な事業として「リスク学のアプローチ」（学会誌特集号 V.5-1, 1993）を出したばかりの時だった。

（1 ページに続く）

＜目次＞

1. 東アジア･リスク研究会議の足跡を辿る（池田三郎）
2. From the President （東海明宏）
3. 編集委員会報告（甲斐倫明）
4. 事務局便り
5. 編集後記（近本一彦）

（1 ページからの続き）

また，SRA との関係では，SRA の理事（Councilor）として私が選出されて（SRA 会員の投票による正式の選出手続きを得た），運営に若干でも関与した時期だった。現在進行中のグローバル化されたリスク研究の世界に対応できる SRA の組織再編問題にも関係すると思われるので，この機会に関係ある出来事を，記憶と公式資料（保存資料がほとんどなく，SRA Newsletter, 本学会理事会議事録等）を頼りに記しておきたい。

当時（1992-1994）の SRA の会長・副会長の W. North, J.D. Wilson 両氏（SRA の会長の任期は，President-Elect, President といういわば２年任期制となっていて，President-Elect の時には年次大会の責任者）であり，わが国でも多くの知己をお持ちの W. North 氏（Decision and Policy Analysis）は，SRA の国際化に尽力され，チェルノブイル原子炉事故(1986) を経験した SRA Kiev-Chapter の設立を支援，1992 年には訪日され，第５回研究発表会（京都大学：木下冨雄元会長が担当された）で，米国における有害廃棄物（核廃棄物も含めて）処理を巡るリスク分析問題を太平洋越しのグローバルな観点からの講演（”Perspective on Risk Analysis from across the Pacific”：日本リスク研究学会第５回研究発表会, 1992）をされたのが印象深い。President-Elect であった James D. Wilson 氏（Science Policy Analysis, AIHC and Monsanto Co.）も闊達な性格の方で，この両氏の示唆もあり，1995 年の日米合同のハワイ学会が実現したこともこの際に言及しておきたい。この両氏が SRA 会長であった期間が，実は，私が理事を務めた時で，欧州と日本の２つの大きな SRA-Section の発展を受けて，”Future Structuring of the SRA” の検討が始まった。このための特別検討委員会が Wilson 会長の発議で組織され，私も，理事会のメンバーの一員として加わった。Wilson 氏の持論は，President を担ったときの抱負で述べているように，’ Right now the Society is very much a U.S. organization that has active members abroad. ……We need to work toward equal status for the U.S., Japan and Europe Sections, ” (SRA Newsletter, V.12-4, p.1) . しかしながら，当時の SRA-Japan は，研究や国際的な貢献の事例や実績等，圧倒的な米国の研究や実力にまだ学ぶ段階であり，彼の提言に応じて，SRA-Japan, SRA-Europe 等が対応な立場から参加できる組織形態を取るという構想に応じる実力は不足していた。また，SRA-Europe の事情も，多様な欧州の組織を抱えて，当面，対応するだけの資金面での余裕もなかったようで，国際的な学会として SRA を再編する構想の議論を特別の理事会を招集して行ったが，時期尚早として，構想を具体化する段階に至らないまま，この議論（再編を含む将来構想:Vision and Strategic Planning）は残念ながら立ち消えてしまった。まだ，現在のような E-mail や電子会議の手段が整っていない時で，議論の動向を追い，重要事項には一言だけでも意見を言うだけでも大切ではないかと考えて，何とか旅費を工面して毎回，参加は続けたが，結局のところ，会長経験者による 1995 年の穏やかな勧告（Report from the Advisory Board: SRA Newsletter, V.16-1, p4）として残された（The first 25 years of the SRA, Risk Analysis, V.25-6, p.1366-1367, 2005）。

２．第１回東アジア・リスク会議（仮称）：1998 年北京会議

1995 年の SRA の日米同時開催のハワイ大会に出席されていた中国の北京師範大学 Prof. Shi Peijun と韓国の延世大学 Prof. Dong Chun Shin の両氏と知己を得ての学会での会食中の会話で「東アジアの地域でもこのような会議をもって，相互にリスク研究を刺激しあう環境の必要性」をお互いに確認しあった。帰国後まもなく，Shi Peijun 氏からの，北京師範大学で第１回目を北京に招聘したいという提案があったのが，そもそもの発端だったと記憶している。その後，おおよそ１年位をかけて，リスク研究会議の性格や内容の交渉を行った。幾つかの行き違い等（参加の条件，登録料，論文集の発行等）があったのは当然だが，一方は

中国を代表する研究機関であり，当方は，一介のマイナーな学術団体だったので，いろいろな交渉の末にやっとこぎつけたという思いは今でも残っている。

会議のプログラムの詳細は，後に論文集として発行された緑の大部の冊子（Risk Research and Management in Asian Perspective: Proceedings of the First China-Japan Conference on Risk Assessment and Management, International Academic Pub.,1998, ISBN 7-80003-463-4：日本リスク研究学会事務局に１部保存）に譲るとして，全体集会（Plenary Session）は，中国では，学際的なリスク研究（自然科学と人文・社会科学の両側面）を議論する国際的集会は初めてという事情を配慮して日本から２つの講演（SRA-Japan, 環境庁北京センター（環境保全技術援助））を，関係者のご協力を得て用意した。

1) Saburo Ikeda (University of Tsukuba):
Ten Years of Risk Analysis in Japan and Research Agenda toward 21 Century

2) Hideaki Koyanagi (Japan-China Friendship Environmental Protection Center):
Environmental Cooperation between Japan and China

また，学際的なリスク分析を拡げるという意味で SRA の専門家（President and President-Elect ）を日本リスク研究学会から招待して上記の目的から見て適切なテーマでの講演を依頼した。

3) Rae Zimmerman (SRA Ex-President):
Historical and Future Perspective on Risk Perception and Communication

4) Gail Charnley (SRA President-Elect):
Risk Tradeoffs in Public Health

残念ながら，President-Elect の Gail Chamley 氏は急務のため出席不能（論文参加）となったが， R. Zimmermann 氏が招待を，旅費（エコノミー）と滞在費のみの提供で快く引き受けていただき，今回の会議の目的に沿ってリスク認知やリスク・コミュニケーション研究の重要性を強調していただいたのは，勿論，つくばでの日米リスク・シンポジューム（1984: SRA-Japan News Letter V.20(3), 1-10, 2007）に来日されて以来の SRA-Japan の活動を重要視していただいたものと解釈している。

一方，中国側からは，全体集会のテーマとして次の 2 件の講演があった。

5) Liu Enzheng and Shi Peijun (People’s Reinsurance Company of China, Beijing Normal University):
Natural Disaster and Strategy of Disaster Reduction through Insurance in China

6) Hung Chongfu (Beijing Normal University):
The Concepts and Methods of Fuzzy Risk Analysis Application to Disaster Management

開催準備の段階で，我々にとっても関心の深い，夏の長江大洪水（1998）や黄砂・酸性雨等のリスク研究に係る講演等を希望したが，「長江大洪水」はニュース映像を編集したと思われる紹介があったものの，理工学技術や伝統的なリスク管理からみたリスク研究や事例の紹介が多く，「リスク学の学際性」に根ざした研究交流をどのように進めるかということでは課題が残った。また，英語を母国語としない参加者が多数を占める会議で Poster Session を充実させる方針を事前に，相手側の北京師範大学（資源・災害地理学関連の研究グループ：Shi Peijun 教授，副学長が代表）にお願いしていたが，展示場所，そこでの対面や質疑の方法・手段など，改善の余地を痛感した。

閉幕の「まとめのセッション」は，次回の企画も含めた「Toward Asian Network of Risk research and Management」として，日本側からは，小林定喜（放医研），谷口武俊（電中研）両理事，中国側からは，Lin Hai (National Natural Science Foundation) and Guoyi Han (Beijing Normal Univ.)等の討論者で進行されたが，最後に，国際会議の進め方を熟知されている小林定喜理事に日本，中国を含め，東アジア地域に共通のリスク研究の議題設定をうまくまとめていただいた（ただし，残念ですが，その記録が残っていません。小林先

生に是非，機会があれば補足していただきたいと願っています)。

結論は，日本と中国という２国間の枠を超えて，東アジアの研究者のネットワークを構築し，継続的な協力関係を作り上げること，次回は 3 年後の 2001 年を目標に日本で開催ということになった。

(SRA NewsLetter V.19-1, p7 SRA-Japan より)

３．第２回東アジア・リスク会議：2001 年神戸会議

バブル崩壊の後遺症からかろうじて立ち直りかけてきた兆しが見えてきた 2000 年前後，かねてからの日本リスク研究学会としての公約である第２回東アジア・リスク研究会議を，何時，何処で開催するか，理事会，事務局でも常に心がけてきた。幸いにも，酒井泰弘会長，高尾厚理事（神戸大学）のご努力でその年の年次研究発表会を兼ねて，神戸大学で開催することが，2000 年 11 月の理事会（明治大学で開催）で決定した。この２回目の東アジア会議の主要な使命のひとつが，韓国のリスク研究者との交流という課題だったので，SRA の年次大会で知己を得ていた Prof. Dong Chun Shin (Yonsey University) と連絡を取りながら，また，韓国でのリスク研究に詳しい大島輝夫理事のネットワークによるご尽力により，毒性学分野の研究者等の関心や参加を得ることが可能となり，会議の総合テーマとして「２１世紀のリスク研究ーアジアからの視点」となった。

運営面からみると，第１回目の開催にご尽力された中国のリスク研究者等をネットワークの継続という意味でも招待（旅費，滞在費）する必要があり（具体的に要請されたわけではないが)，韓国からの招待講演者も含めて，このための手当てに苦労はした。幸いにも，酒井泰弘会長（当時）と私が受けていた科学研究費による国際研究集会も兼ねる方向での解決が可能となり，また，高尾厚理事のご努力で神戸大学のご協力もあり乗り切ることができた。

全体集会（Plenary Session）の講演テーマとしては，日本からは，特別講演として，我が国の保険学の重鎮である水島一也（神戸大学名誉教授）氏からの「リスクと日本人」を，また，本学会からは，盛岡通元会長（当時：大阪大学）を研究代表者として，学会の総力を挙げて取り組んできた文部科学省の大型ミレニアムプロジェクト「環境リスクの診断・評価・コミュニケーション支援システム」(2000-2002）の概要と今後の展望を，中国からは，越境リスク問題とも言える砂嵐災害リスク問題を，韓国からは，環境汚染・公衆衛生リスク問題の研究の歴史的視点から，それぞれの国の代表的なリスク研究者からの講演を用意できた。:

1) Tohru Morioka (Osaka University)
   Designing Risk Communication Platform for Better Decision-making Based on Pilot Research in Japan
2) Shi Peijun (Beijing Normal University)
   The Risk Assessment and Management of Dust-Storm Disaster in China

3) Dong Chun Shin (Yonsey University)

Perspectives of Risk Assessment and Management in Korea

東アジア会議での英語での発表件数は総計で 34 件，内訳は，日本で研究されている東アジアの研究者も加えると，日本から 10 件，中国 10 件，韓国 ３件，台湾 ２件，米国，アジア諸国５件と，アジアで猛威をふるった新型感染症や微生物リスク関連のセッションで４件（WHO/FAO 及び国立感染症研究所春日文子氏の座長の特別セッション）となり，ここでも東アジア地域での協働したリスク対応（リスク・ガバナンス）の必要性がでてきているのが窺えた。

４．第３回東アジア・リスク会議：2005 年ソウル会議

このソウル大会の準備段階の前半までは，学会の事務局を担当していたが，事務局を現在の土田昭司教授（関西大）に引継いだので，最終段階での諸般の事情や課題については，いわば，外側から見ることになるが，３回目までの足跡の継続性を全うする意味で，前回と同様なスタイルの記録を心がけることにする。日本側は，当時の関沢純会長（徳島大）と大島理事，田中勝教授（岡山大）のご担当で，開催準備の作業は，韓国側の学会事情（日本リスク研究学会に相当する相手側がないために，環境毒性学会，環境化学毒性学会，環境研究学会（何れの学会名も仮の和訳）等々の学術団体の連合と交渉）のために，最終段階まで紆余曲折を経たと聞き及んでいる。

最終的に，会議の名称は「Human and Ecological Risk Assessment in Asia/Pacific Region」となり，主催者は，Korean　Soc. Of Environmental Toxicology (KOSET), Soc. of Risk Analysis, Japan　（本学会）, Soc. of Environmental Toxicology and Chemistry (SETAC) Asia/Pacific，共催として，Beijing Normal University, China, Korean Inst. of Toxicology, Inst. of Global Environment, Kyung Hee University (IGE/KHU). 等々で，まるで，幾つかの国際研究集会を同時並行で行うような雰囲気であった。もっとも，Toxicology に関するリスクの科学的評価の欧米からの最新の研究発表もあり，ある意味で「科学と文化」というリスク研究の学際的な研究の性格を直接に見せるような会議でもあったという印象が残っている。

開催場所は，ソウルの市内の梨花女子大学生会館（Student Union Center, Ewha Womans University）の便利な場所で，日本側としては，第 17 回年次研究発表会を兼ねるという意味で，これまで同様に，東アジアの学際的リスク研究の連帯（ネットワーク）を強化するという意図での，研究発表を呼びかけ，隣国という便利さもあり，総計 52 名が大挙して参加，口頭発表 22 件，ポスター発表 10 件（資料 : Final Circular Nov. 2004）を行った。全体集会（Plenary Session）では，先の２回の伝統を継承して日本，韓国，中国からそれぞれ次のような講演が行われた：

1) Saburo Ikeda (University of Tsukuba, Japan):
   Revisit Risk Analysis: Sixteen Years of SRA-Japan in the Risk Society
2) Dong-Chun Shin (Yonsei University, Korea):
   The Status and Prospect of Health Risk Assessment for the Environmental Pollutants
3) Shi Peijun (Beijing Normal University):
   Linking Land Use Pattern, Process, and Flood Disaster-forming mechanism。

その他，欧米の，特に Toxicology 分野から２件の下記のような全体講演があった。

4) Glen W. Sutter III (US EPA: National Center for Environmental Assessment)

Trend and Prospect in Ecological Risk Assessment

5) David Arnold (Cambridge Environmental Assessment, UK)

Assessing the Environmental Risk of Chemicals: The European Experience

会議の論文集は発行されなかったので（従って，残念ながら，第１７回研究発表会の講演論文集は欠番と

いうことになる），その代わりに，日本リスク研究学会誌と Journal of Risk Research （JRR）への特集号への投稿を呼びかけ，日本リスク研究学会の責任で校閲・編集され（編集委員長：東海明宏現会長，JRR 誌（Vol.10, No.6, 2007）に特集号として 10 編が採録されている。

５．おわりに：東アジアにおける「リスクの学際的研究」のネットワークの形成

「リスクの学際的研究」には，リスク評価と管理における「科学的合理性の物差し」と共に，個人と地域社会が「何をリスクと認知し，何処まで許容し，どの様な手続きや手段でマネジメントするのか」という「人文・社会科学の次元の物差し」による相互作用が重要になる（池田：リスク放談（４）Newsletter Vol.20-3,4）。この十数年間に，日本の学界・企業の研究機関等で，数多くの東アジアの研究者が教育・訓練されて，規模は異なるが多様な研究者のネットワークができている。日本リスク研究学会が細々と培ってきたネットワークもそのひとつに過ぎないが，環境・資源（広域大気，海洋沿岸域，流域河川）等で共通の課題をかかえる東アジアでのリスク研究は，「自然科学的な合理性の物差し」に関する知見も，勿論，いまだ不十分だが，それにも増して，「人文・社会科学的な物差し」の研究や事例の知見とその蓄積への相互理解が不足しているのを，これまでの３回の東アジアの会議の経験を通じて実感してきた。

不確実性の多様な側面を相手にするリスクの学際的な研究は，グローバル社会としての一般性（英語圏の論理が優先）と共に，この東アジア地域の歴史・文化の多様な様相との相互関係性を切り離した文脈では語れない地域性（要素）が数多く存在する。欧米の言語（ラテン・イタリア語，フランス語等）からの語源を持つ英語の「risk」は，日本語では，表音文字である「カタカナ」を用いて「リスク」と表現され，韓国では，ハングル文字の表音機能を利用して「리스크」となり，中国では，古語の「風険（漁民が漁に出る時に，風が吹かないように祈って，遭難の危険を避けたことに関連した語彙）」を，1980 年代に「risk」の翻訳語として借用している（「風険」の注釈は：南京大学 Prof. Zhai Guofang との私信, 2009）。これらの「risk」の概念の表記法の状況は，遙か昔のグローバル化であった漢字文化圏での「危うさ（危険）」という概念を共通に持ってはいるが，必ずしも現在の文脈では同義でないことを象徴するように思われる。

第４回会議の開催テーマ「東アジアを対象にしたリスク研究経験の共有」（日本リスク研究学会東アジア・リスク会議の開催呼びかけ：Call for Papers）が，上記の意味で有効に機能するためには，東アジアの多様なつながり（ネットワーク）の全体像を俯瞰できるグランドデザイン，例えば，個々の研究機関や研究組織とのネットワークから，学会組織間のネットワークまで，リスクの学際的研究の交流経験の蓄積を，誰でも，何処でも，説明責任を担保しながらも利活用できる重層的な組み立てや仕組み（単に論文集を出版するだけでなく）を整えることが，本学会でも必要な時を迎えたのではなかろうか。

2. From the President（会長からのメッセージ）

会長　東海 明宏

第 11 期の活動も活動計画に沿ってひととおりのイベントを開催し，残り 1 年余りとなりました。この場を借りまして，あらためて関係各位の皆様方からのご支援に御礼を申し上げます。事務的連絡内容となって恐縮ですが，第 10 期から活動を引き継いで以来，懸案であったアジアリスク研究会議（Asian Conference on Risk Assessment and Management 2009）も北京師範大学史教授のオーガナイズによって来る 5 月 17-19 日で開催される運びとなりました。また，今回のアジアリスク研究会議の準備期間中，中国リスク研究学会の会長（同じく北京師範大学の黄教授）とも知己を得て，そこが主体となって開催する 2nd International Conference on Risk Analysis and Crisis Response に協賛という形態で協力・連携をすることとなりました。これまで進めてきた日本・中国・韓国による（通称）東アジアリスク研究会議は，どちらかといえば，強い関心を共有しあう限られた範囲の参加者からなっておりましたが，このように，リスク研究へ確実に関心層が広がりをみせております。今回のアジアリスク研究会議が，アジア地域において中心的にリスク研究推進の役割を担う会議に発展していくことを願うものであります。

6 月の春季のシンポジウムは，「リスクガバナンスを支える情報共有プラットフォームの現状と課題－環境，防災，化学物質の事例を中心に－」と題しまして開催されます。また，秋季の年次大会は，早稲田大学にて村山武彦先生を実行委員長に，11 月 28-29 日に開催の運びとなっておりますので，ぜひともご出席をお願い申し上げます。

話をかえます。本学会は，リスク研究に関わる個人の集合体でございます。昨今，研究プロジェクトが大型化するにともない，ともすれば，なかには，アイディアは古いものであっても，物量に任せて装いを新たにされた，の観がなきにしもあらずのものが皆無とはいえません。大規模なしかけがあれば，十分性は発揮できましょうが，それが必要条件ではないのが，リスク研究分野の特色ではないかと感じております。将来，大河になるような研究成果を，本学会では，年次大会，学会誌，JRR を通じて関係者と共有させていただくことが重要な役割であると考えております。

引き続き，ご支援・ご鞭撻をいただきたく，よろしくお願い申し上げます。

3. 編集委員会報告

日本リスク研究学会誌編集委員会は学会誌の季刊の発行を目指して，(1)査読のスピードアップ化，(2)総説論文の充実などを重点的に行っております。これによって今年になって投稿された論文は投稿日から早くて 1 ヶ月から 2 ヶ月以内のペースで投稿から査読結果がでるところまでスピードアップ化されてきました。これは編集委員や査読委員の協力によるものであります。投稿から 3 ヶ月で資料論文として掲載されるところまできております。ぜひ，会員の皆様の積極的な投稿をお待ちしています。

また，総説論文も積極的に投稿をしていただき，リスク学の活発な情報提供あるいは意見交換のジャーナ

ルとして質の高いものにしていきたいと考えています。19 巻 1 号では特集「リスク概念に基づくアプローチを阻害するのは何か」で 5 人のリスク学分野を代表する先生方に執筆していただきました。現在のリスク概念に関する諸問題を理解する上で有用な総説論文となっておりますので，ぜひ一読することをお勧めします。

2009 年の 19 巻は 2009 年 6 月末に 2 号に，9 月末に 3 号，12 月末に 4 号の刊行を目標に編集を進めております。会員以外の方も投稿できる仕組みに変わっておりますので，身近な非会員の研究者にもお知らせいただき，リスクに関係する論文の投稿を勧めてください。さらに学会誌を充実したものにするための会員のご協力をお願いいたします。

日本リスク研究学会誌編集委員会　甲斐 倫明

4. 事務局便り

1. 年会費（2009 年度）振り込みのお願い

年会費の振り込みをお願い申し上げます。できるかぎり郵便振替書（２．に記載の郵便振替口座）をご利用下さい。通信欄には宛名ラベル右下に記載の番号（登録番号）をご記入下さい。「名誉会員」の方はお振り込みの必要はございません。

会費は，日本リスク研究学会誌のみ購読会員（一誌購読）と，日本リスク研究学会誌・Journal of Risk Research 購読会員（二誌購読）の 2 種類になります。

【お願い】2009 年度より Journal of Risk Research 誌購読（二誌購読）への変更をご希望の場合は，お振り込みの際お手数ではございますが，必ず“『二誌購読に変更希望』”と通信欄にご記入下さい。JRR の購読を中止される方は必ずその旨お書き添え下さい。購読誌の変更手続きをいたします。

	入会金	年会費（日本リスク研究学会誌と JRR 購読）	年会費（日本リスク研究学会誌のみ購読）
正会員	¥3,000	¥12,000	¥6,000
学生会員	無料	¥9,000	¥4,000
賛助会員	¥10,000	¥50,000	¥50,000
名誉会員	無料	無料	無料
購読会員	¥3,000	¥13,000	¥6,000

JRR：Journal of Risk Research

「入会金」は入会初年度のみのお振り込みです

2. 年度会費未納の方へお振り込みのお願い【至急】

過年度（2008 年度を含む）会費をまだお振り込みでない方は，至急下記までお振り込み下さいますようお願い申し上げます。お振り込みの確認ができましたら，発送を停止しております学会誌をお送りいたします。

【郵便振替口座】口座番号：００３３０－０－１１９６４
加入者名：日本リスク研究学会
＊＊＊他金融機関からの振込口座番号＊＊＊
〇三九（ゼロサンキユウ）店（０３９）　当座００１１９６４

3.　第４回　東アジアリスク研究会議　　論文募集のご案内

2009.4.3

日本側世話人　日本リスク研究学会　近本・土田・東海

会議の詳細は以下のとおりでございます。日本，中国，韓国，他のリスク研究者 が集まる唯一の会議です。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

開催場所　：北京師範大学　http://www.bnu.edu.cn/
主催：北京師範大学，韓国毒性学会，日本リスク研究学会
日時　　：2009 年 5 月 17（日）－19（火）
大会テーマ：アジア各国におけるリスク研究経験の共有
オーガナイザー：史　教授（北京師範大学）
参加登録等：以下から行ってください.
<http://www.irisknet.cn/EARAM/index.html>http://www.irisknet.cn/EARAM/index.html＞
テーマの締め切り：2009 年 4 月 10 日
アブストラクトの締め切り：2009 年 4 月 30 日

問い合わせ先：日本リスク研究学会　事務局　日本リスク研究学会事務局
〒564-8680　吹田市山手町 3-3-35　関西大学社会学部　土田研究室気付
http://www.sra-japan.jp/cms/modules/liaise/index.php?form_id=6/&PHPSESSID=ebba21b9770a4611c98b5037348dbbe9　　・・・事務局への質問受付フォームを使用してください。

＜学会誌大会特集号の刊行＞
会議の成果を広く世界に発信することを意図して，フルペーパーは次の２つの雑誌 で刊行いたします。投稿された論文は，それぞれの雑誌の編集委員会にて査読を受けます。論文提出時に，希望する雑誌を指定してください。Journal of Risk Research は，日本リスク研究学会と欧州リスク研究学会の共同刊行雑誌です。提出締め切りは，2009 年 7 月 31 日とします。

■Journal of Risk Research の特集号として刊行いたします。編集委員：関澤　純，広瀬弘忠
■日本リスク研究学会誌特集号（英文，web 発行）。編集委員長：甲斐　倫明

4.　平成 21 年度　総会開催のお知らせ

平成 21 年度の総会を下記のように開催いたします。ご出席くださいますようお願いいたします。
総会にご欠席の場合は，必ず委任状(6 月 16 日(火)〆切)をご提出ください。
ニュースレターVol.21-3&4 に同封のはがきをご利用下さい。また，E-mail での委任状も有効です。まだの方はご提出をよろしくお願い申し上げます。
会場：東京大学 山上会館（http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_00_02_j.html 参照）
日時：　2009 年 6 月 19 日（金）13:00 ～ 14:00

5.　第 22 回シンポジウムの開催

平成 21 年度シンポジウムを下記のように開催いたします。ご関心のある方方をお誘い合わせの上，ご参加くださいますようお願いいたします。

日本リスク研究学会　第２２回シンポジウム　（暫定版）
『　リスクガバナンスを支える情報共有プラットフォームの現状と課題　ー環境，防災，化学物質の事例を中心にー　』
日時：平成 21 年 6 月 19 日（金）　14:00-17:00
場所：東京大学山上会館（東京都文京区本郷７丁目　東京大学本郷構内（三四郎池隣り））
参加費：第一部　シンポジウム
　　会員・協賛会員及び学生　2,000 円，一般 3,000 円　（講演要旨集代を含む）
　　第二部　意見交換会
　　会員・協賛会員及び学生　3,000 円，一般 4,000 円　（立食代を含む）
主催：日本リスク研究学会
協賛：(社)地理情報システム学会，エコケミストリー研究会，環境アセスメント学会，サステイナビリティ・デザイン・オンサイト・研究センター，(社)環境科学会，(社)環境情報科学センター，(社)行政情報システム研究所，(社)大気環境学会，(社)土木学会，(社)日本化学会，(社)日本水環境学会，特定非営利活動法人　安全工学会，(独)防災科学技術研究所，日本環境化学会，日本環境管理学会，日本計画行政学会，日本災害情報学会，日本自然災害学会

開催趣旨：市民社会，消費社会の成熟化に伴い，リスクをさまざまなステークホルダーが協働して管理（統治）するという，リスクガバナンスの社会的な要請が高まりつつある。よりよいリスクガバナンスを実現するためには，専門家間の分野横断的な情報共有に加え，さまざまなステークホルダー間でハザード及びリスク情報を相互に活用できるリスク情報プラットフォームが不可欠となる。リスク情報プラットフォームは，科学技術の発展に加え，リスク・コミュニケーションを通じた相互理解や社会的な意思決定を高度化させる役割が期待される。

そこで，本シンポジウムでは，化学物質，環境，自然災害の３分野のリスク情報プラットフォームを事例として，各プラットフォームのミッションとその技術的，社会制度的な課題を紹介いただき，分野を超えた語論を通じてリスク情報プラットフォームの将来像を展望する。

～プログラム～

14:00-14:10　【開会挨拶】東海明宏　会長（大阪大学大学院　教授）

【話題提供】　各発表者の発表 20 分＋質疑５分
1　14:10-14:35　「化学物質情報プラットフォームの研究開発」（仮）
　　亀屋隆志　横浜国立大学　准教授
　　http://www.anshin.ynu.ac.jp/renkei/project.html
2　14:35-15:00　「環境 GIS が目指すもの」（仮）
　　松本公男　国立環境研究所環境情報センター　センター長
3　15:00-15:25　「データ統合・解析システム　-データの相互流通性の支援-」（仮）

長井正彦　東京大学　地球観測データ統融合連携研究機構　特任助教

http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/dias/index.html

４　15:25-15:50　「災害リスク情報プラットフォームの研究開発」（仮）

長坂俊成　（独）防災科学技術研究所　防災システム研究センター　主任研究員

＊＊＊＊休憩 10 分＊＊＊＊＊

【総合討論】16:00-17:00

座長　片谷教孝　（本学会常任理事，桜美林大学リベラルアーツ学群基礎数理専攻　教授）

上記話題提供者をパネリストとして総合討論

専門家間によるリスク評価やリスクマネジメントのためのリスク情報プラットフォームの必要性やその実現に向けた技術的・社会制度的な課題に加え，市民等ステークホルダーのリスクコミュニケーションや個人のリスク対策の意思決定支援を目的としたプラットフォームのサービスや社会的な運用のあり方などについて討論する。

17:20－19:20　意見交換会（山上会館内　地階レストラン）

※講演タイトル等詳細情報は, 会員 ML･学会 HP ＜http://www.sra-japan.jp/cms/＞で随時更新いたします。

お問い合わせ・お申し込み先：〒560-0043　大阪府豊中市待兼山町 1-9　大阪大学豊中キャンパス内　大阪大学生活協同組合　事業企画室内　Fax:06-6841-1963

日本リスク研究学会事務局係　担当:中村

学会 HP＜http://www.sra-japan.jp/cms/modules/liaise/index.php?form_id=7＞からお申し込みください。

※お申し込みの際は，会員区分・参加部（第一部・二部）をご通知下さい。

【お振込先】郵便振替口座：　00330-0-11964　（加入者名：日本リスク研究学会）＜2009.06.10 締切＞

（お問い合わせには，mail・HP あるいは Fax をご利用下さい。後日ご連絡差し上げます。）

6.　第４５回（第１１期第２回）理事会の案内（役員の方はご予定下さい。）

会場：　東京大学 山上会館

日時：　2009 年 6 月 19 日（金）午前 10:00- 12:00

7.　第 22 回年次大会の案内

第 22 回年次大会

✧　日時：　2009 年 11 月 28 日(土)－29 日(日)

✧　場所：　早稲田大学大久保キャンパス（4 月から名称変更：西早稲田キャンパス）

［169-8555　東京都新宿区大久保 3-4-1］

地下鉄副都心線　西早稲田駅下車 0 分

JR 山手線，地下鉄東西線高田馬場駅下車　徒歩 15 分弱

最新情報は学会 HP あるいは会員 ML でご案内いたします

8.　学生会員の皆様へ

学生会員の方には学生証のコピーを毎年 4 月 1 日以降提出していただいております。
郵送がまだの方は，早急に学会事務局係宛にお送り下さい。

9. 変更届

ご連絡先（ご住所・e-mail 等）に変更が発生した場合は，事務局係（e-mail：office1@sra-japan.jp，Fax：06-6841-1938）まで早急にお知らせ下さい。

10. 日本リスク研究学会共催・協賛イベント一覧

【2009 年度】

1) イベント開催日：平成 21 年 4 月 16 日（木)～17(金)
共催・協賛の別：共催
主催：日本学術会議土木工学・建築学委員会
イベント名：第 23 回環境工学連合講演会
会場：日本学術会議講堂
参加費：無料
連絡先： 日本学術会議事務局参事官（審議第二担当）付　生形・加藤・関
Tel：03-3403-1056　Fax：03-3403-1640　E-mail：s253@scj.go.jp

2) イベント開催日：平成 21 年 7 月 9 日(木)～11(土)
共催・協賛の別：協賛
主催：社団法人日本機械学会
イベント名：第 19 回環境工学総合シンポジウム 2009
会場：財団法人おきなわ助成財団・沖縄県男女共同参画センター「てぃるる」
連絡先：社団法人日本機械学会環境工学部門　担当：宮原ふみ子
Tel：03-5360-3505　Fax：03-5360-3509　E-mail：miyahara@jsme.or.jp

3) イベント開催日：平成 21 年 7 月 10 日(金)
共催・協賛の別：共催
主催：エコケミストリー研究会
イベント名：特別シンポジウム「土壌汚染対策法の改正と今後の土壌汚染対策」
会場：自動車会館（JR 総武線／東京メトロ／都営地下鉄「市ヶ谷駅」徒歩 2 分)
連絡先：〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-7 横浜国立大学総合研究棟 E302 内
Fax：045-336-4036　E-mail：ecochemi@ynu.ac.jp

5. 編集後記

来る 5 月 17～18 日に北京師範大学で，日本，中国，韓国を中心とした東アジアのリスク研究会議が開催される。実は，これはシリーズものであり，今回で４回目を数える。小生は，第２回の神戸会議に参加し，当時は理事ではなく，監査の役割を仰せつかっていたと思うが，当学会 SRA-Japan の役員の方々と中国からの招聘者らの酒席の会合において末席に着かせて戴いたのを記憶している。

学会活動という経験を通じて痛切に思うことは，当該会合の企画・運営には，底流に企画立案者のしっかりとした意図があるということである。しかも，歴史ある会合の場合は，長年携わってきた人々の意図が自然に反映されてきており，大きな流れを作っている。ある瞬間において，時流に乗ったテーマを掲げることもあるだろうが，それはそれなりに，その潮流の中での扱われるべき意義が見出され，企画されているのである。小生あたりは，そのようなことはあまり気にせず，いろいろな会議に顔を出し，表面的な情報や，様々な専門家との意見交換に欣喜雀躍するが，実は，参加者の満足度が高い会合というのは，その底流にある企画・運営がしっかりと揺ぎ無く下支えをしてくれていることが少なくない。

そこで，当学会の常任理事を仰せつかっている立場として，この東アジア会議の意義を汲み，今後，如何なる方向性で議論していけばよいのか，当学会は如何なる役割を果たすべきなのか，この機会に考えてみたいと思った。

リスク放談を楽しみにされている学会員には大変申し訳なかったのだが，今回は，リスク放談はお休みにして，その誌面を東アジア会議の温故知新とでも言うべき内容に割くことにした。以前リスク放談を執筆して戴いた池田先生に，突然にお願いをして，お忙しい中，筆を執っていただいた。本来ならば，我々理事会で議論し，方向性を見出していくべきところが，池田先生の文章をみてもわかるとおり，先生から多くのヒントを戴いた。

米国の SRA 傘下で活動していくのか，米国 SRA に対等である団体として活動していくのか（近本個人としては，SRA-Japan は少なくとも対等と考えている）についても議論を必要とするところであるが，米国 SRA 会長の考え方を見極めながら，今後も議論していかなければならない。SRA-Japan のどれだけの会員が米国 SRA の会員になっているか定かではないが，米国 SRA にとって，SRA-Japan の存在は会員数だけでは測れないほどになっていると思う。その一方で，アジアに目を向ければ，SRA-China というのが発足したようであるが，昨年，メキシコで開催された世界リスク会議での各国（各団体）代表の理事会合では，今ひとつ，SRA-China の実態が分からなかった。この度の東アジア会議では，SRA-China も共催者として関与してくれており，これをきっかけに SRA-China の実態を把握しつつ，SRA-Japan と SRA-China との良好な関係が構築されていければと思う。また，韓国に関しては SRA-Korea という組織体があるわけではないが，この東アジア会議を続けていくことで，SRA-Korea 発足の動きを啓発することになるかもしれない。

海外における会合は，ややもすると，イベント色が強くなり，がっかりさせられることも時々あるが，我々 SRA-Japan が関与していく限りは，しっかりとした企画立案のもとに，リスク研究者や実務者のための基盤を整備していくことが第一義ではないか，と編集後記を執筆しながら思った次第である。

広報委員長　近本 一彦